島崎藤村と「中学世界」

― 更に、画家達との関係 ―

「発表資料」

掛川　邦男

○　島崎藤村の**「千曲川のスケッチ」**が初めて発表されたのは、博文館発行の「中学世界」であります。

「中学世界」は明治三十一年～昭和三年まで、約三十年間にわたって刊行されていました。当時の「受験情報雑誌」であります。読者層は中学上級生の三年、四年、五年生でした。（当時は五年制度）。旧制の高等学校や専門学校、更には陸軍兵学校、陸軍経理学校、陸軍士官学校、海軍兵学校、海軍機関学校、海軍経理学校、等々を目指す青少年でありました。

所謂、「受験雑誌」に「千曲川のスケッチ」が約一年間連載されたと云う事を、私は不思議に思って居ました。

それで、現物の『中学世界』を閲覧したいと、国会図書館へ行って見ましたが、貴重本と云う事で、マイクロフィルムでしか見る事が出来ませんでした。しかし一応、十二回分をコピーして、眺めて見ますと、興味深く思った事には、「千曲川スケッチ」には元々、文章に相応しい倉田白羊画伯の挿絵が有る事を知りました。その後、三康図書館で「中学世界」の原本の閲覧が可能である事を知り、閲覧させて貰い、「中学世界」の全体像を知る事が出来ました。すると『中学世界』の誌上では、島崎藤村と小諸義塾で同僚教師であった「三宅克己」「丸山晩霞」が毎月、口絵や挿絵、表紙画を描き活躍している事を知り、驚きました。

○　明治初期の印刷技術は未発達であり、木版画以外のカラー印刷物は極めて少なく、雑誌等も銅版印刷による写真、書、水墨画等をモノクロの口絵として掲載し、それぞれの雑誌の特徴として居ました。明治三十五年頃になると、特集号には石版印刷による表紙のカラー化が見られる様になり、やがて、口絵もカラー印刷される様になります。　三宅克己が小諸義塾を辞めて上京したのは、明治三十三年十二月であり、丁度、日本で石版印刷が始った時期でもありました。三宅克己の絵が「中学世界」の口絵として初めて掲載されたのは、明治三十七年十一月。以後、毎月の様に三宅克己の口絵が掲載される様になります。

そして、明治三十九年四月号には**「明治教育史上の大人物」**「名士の学生時代実話」の一人として『三宅克己君』と題して「来歴記」を執筆して居ます。（当時三十四才）。これによると、少年時代から、好きで得意であった風景写生を描き続け、遂には米国へ苦学留学をしながらも成功し、更には水彩画の本場英国で学び帰国した訳ですが、この事が、その後の画家達に洋行を促し、現在にも影響を与えて居るのであります。

○　次に丸山晩霞が小諸義塾を辞めて上京したのが明治三十八年秋。「中学世界」の挿絵を描き初めたのが明治三十九年一月からで、以後毎月の様に挿絵、表紙画、口絵を描く様になります。多分、三宅克己の推薦に依るものと思われます。

○　この様に、三宅克己や丸山晩霞が『中学世界』で活躍して居り、そうなると、当然、島崎藤村にも登場して貰おうとの雰囲気があったものと思われる訳です。　そして島崎藤村の登場です。

○　明治四十年三月の**「我が修学時代」**と云う特集号に、島崎藤村は**「わが生涯の冬」**と題して、上京以来の自分を冷静、客観的に振り返り、方向が定まらぬままに過ごし、やっと文学の旅行を始める迄の過程を記述している。そして、「昔から少年は『春』、青年は『夏』としてある。だが、私は少年の時代を寧ろ『冬』として見たい。」「『冬』と云う季節は、すべての物の準備時代で、目に見えるものは枯れ～として居ても、下には、木の芽がもう形をつくって、花を開くべき仕度に急がしい。」「思えば自分等の修学時代はこの冬であった。自分は長い、長い冬を通り越して来たような気がする。」と結んだ味わい深い、藤村三十五才の時の文章であります。

この文章は「藤村全集」第六巻「拾遺」の項に-**談話**-として掲載されています。**談話**となって居ますが、私はこの文章は藤村自身が執筆したか、詳細に添削した文章だと思います。

言わば、藤村の作家としての原点を記した文章だと思います。初版の意味で転載しました。

そして、この特集号には、丸山晩霞も**「余が洋画の経路」**と題して自分の来歴を詳しく記述しています。晩霞三十九～四十才の時の文章です。彼も三宅克己の影響で米国へ渡り、予想以上の大成功を収め、更には欧州各地を漫遊して帰国。郷里に画室を建てた頃、島崎藤村の紹介で小諸義塾に勤めはじめた事も書かれています。そして、この特集号の口絵として晩霞の**「吾が春」**が掲載されています。

○　明治四十二年一月号に**「島崎藤村訪問記」**が掲載されます。これは、インタビュー記事です。**「この記事」**は、殆ど知られていないと思います。実は今回、発表させて頂く気になったのは、この**「島崎藤村氏訪問記」**を会員の皆様にも知って頂きたい、と思ったのが動機であります。また、インタビュー者を画家の「岡野　栄」氏と私なりに断定致しました。

○　「新片町より」が明治四十二年五月に掲載されました。

『藤村全集』(筑摩書房)(第六巻)の解説「解題」には「新片町より」は明治四十二年九月に佐久良書房版「文芸入門第一編」として出版された、とされていますが、その重要な一部分は四ケ月前に「中学世界」に掲載されて居たのであります。

そして「藤村全集」では一部の文章が削除されています。削除された文章は、

○「愛―という言葉は、よく繰り返される言葉である。愛を説いて人を愛しないという実例をも亦同時によく見かけることである。これは何故だろう。如何なる欠点をも容してこそ兄弟の愛である。姉妹の愛である。愛を説いても人を許さないような愛は畢竟空想の愛ではあるまいか。」　何故この文章を削除したのか？研究課題でもあります。

○明治四十三年一月。新年号の特別企画として、大々的に募集した**「日本学生の歌」**の選者として、「新渡戸稲造、芳賀矢一、**島崎藤村**、大町桂月、田村虎蔵」が名を連ねています。そして、応募された歌詞の論評をそれぞれ行っていて、島崎藤村は五ページにわたって、若者に対する、眞に親切、丁寧、温かみのある論評を行ってます。正に小諸義塾での教師の経験が甦ったかのように、藤村自身が楽しみ、熱を入れて論評した事が偲ばれる文章であります。

尚、藤村が九〇点と云う選者中最高得点を与えた歌詞が第一位となっています。

○明治四十三年七月に**『遠野物語』**と題して**柳田國男**（当時三十四才）の民話集「遠野物語」を高く評価した書評が掲載されています。そして、「さらに君から旅の観察を聞きたい。私は第二第三の『遠野物語』が種々な形で出て来ることを希望する。」と結んでいる。この文章は、後に出版された「新片町より」の中に含まれているので省略致します。

○明治四十四年五月号に**「千曲川のスケッチ」**が登場します。翌年の明治四十五年の八月号まで、十二回にわたって連載されました。いずれの回にも**倉田白洋**画伯の挿絵が描かれて居ます。

十二回目の最終回に際して、藤村は次のような付記を書いて居ます。

「この項、昨年の初夏より始め、今年の梅雨も収まらんとする頃に漸く終わりを告げる事が出来た。途中すこし身体の具合が悪かったりなぞして二月ばかり休んだのは残念であったが、先ず先ず書き終えた。このスケッチの中にあることで種々思い出したと云って手紙を寄せられた人々へはお礼を申し上げる。一年の余も親しみを重ねた諸君へもこれで一と先ず、お別れを告げることにする。左様なら。（七月五日）

○この年、**七月三十日明治天皇が崩御され八月からは大正元年となります。**尚、**乃木大将夫妻**が九月十三日殉死されました。

○その後も大正六年の三月、四月、五月と**「羅甸區のおもいで」（一）、（二）、（三）**と連続で執筆しています。これは藤村がフランス滞在中に住んでいた、ソルボンヌ付近の学生街の様子をスケッチ風に綴ると同時に、第一次世界大戦中のフランス人学生の様子や、一般のフランス人気質等を鋭く評論した文章であります。

これを読むと、自分もこの地区を歩いて見たいとの思いにさせられます。更に、当時のフランス庶民の潜在意識が、理解出来る様な気が致します。これ等の文章は『藤村全集』に収められている筈であるが、……。

今回の**「島崎藤村学会・神戸大会」の「大会テーマ」は「藤村にみる国際性」**でありますので、この**「羅甸區のおもいで」**も参考資料としての、一助になると思います。

○島崎藤村と三宅克己、丸山晩霞は小諸義塾時代同僚教師であった訳ですが、その後、それぞれ、時期が異なって上京した為に、上京後は、お互いに関係は薄かったと、私は思って居ました。しかし**「中学世界」**の誌上では、矢張り同僚だったと云えると思いました。

○**「中学世界」は昭和三年に廃刊**となりましたが、当時の雑誌はカラー写真が無かった時代なので、画家との関係が非常に重要で、彩色された表紙や口絵が雑誌の売り上げを左右し兼ねかったと思われます。逆に画家も雑誌社に育てられたと云うべきで有りましょう。その一例が**竹久夢二**であります。明治三十八年、二十二才の時に投稿したコマ絵が一等賞に入選、この時初めて**「夢二」**を名乗ります。更に翌年、夏季増刊号にスケッチ画が再度、一等賞に入選。この賞金を受け取りに行った際、面談した編集長の西山緒山氏から「もう少し数多く持ってくるように」云われ、それが「中学世界」に掲載され、更に多くの挿絵、口絵、表紙画を描く様になります。その後の人気画家へと成長する最初の段階となったのであります。

しかし、その後も中央画壇には受け入れられる事はなかった様です。

竹久夢二は昭和九年九月、結核が悪化し五十一才で亡くなりますが、死の直後、画家の**有島生馬**が編纂した夢二の**「病床遺録」**に**島崎藤村**が**序文**を寄せています。（「改造」 昭和九年十二月）

○ **次は、参考までになんですが、**丸山晩霞が明治四十年十月号の「中央公論」に執筆した**「島崎藤村著『水彩画家』の主人公について」**を転載して居ります。

確かに一時は、モデル問題で仲違いをしましたが、判ってしまえば、世間の話題になった事で、お互いに知名度が上がったと云うべきで、深刻にならなかったのも、同僚の誼だろうと思います。同じ時期、丸山晩霞の著作「女性と趣味」に、藤村が「序文」を寄せている事でも判ります（明治四十年七月）。更に、心配した知人の手紙に対しての返事の中に、藤村は「モデル問題の騒がしくなりしには驚かれ候。丸山君は一時の戯語なりし由、先日も手紙をよこし候。文藝上の論争として眺めてこそ面白けれ、私交上に及ぼすべき性質のものならず、君の心配も過ぎたりと存候。」（十一月十一日）と書いて居ます。

◎ **「まとめ」としまして、**島崎藤村が**「中学世界」**に登場するのは明治四十年三月**『吾が生涯の冬』**、明治四十一年一月**『島崎藤村氏訪問記』**、明治四十二年五月**「新片町より」**、明治四十三年一月**『日本学生の歌を讀む』**、明治四十三七月**『遠野物語』**、明治四十四年五月～明治四十五年八月まで**『千曲川のスケッチ』**に十二回、大正六年三月～五月まで**『羅甸区のおもいで』**に**三回**と十年間**に二十回**、登場しています。かなり頻度が高いと思います。

特に**『千曲川のスケッチは』**、小諸義塾時代に三宅克己や丸山晩霞の影響を受けて、画家がスケッチをする様に、文筆でスケッチを試みたものでありますから、両者が活躍して居た『中学世界』に掲載したのは最良であったと思います。

○ **著作権について。**今回は、各著作の抜粋ではなく、全文を掲載しました。新しい著作ならば、著作権が存在し、全文掲載は困難であります。著作権は著作者の死後五十年間有効とされています。島崎藤村（昭和十八年八月）、三宅克己（昭和二十九年六月）、丸山晩霞（昭和十七年三月）に亡くなられ、何れも五十年以上経過して居り、著作権は消滅しています。御冥福を祈りつつ全文を掲載させて頂きました。

○ それにしても、**「小諸義塾」**は他の教師を含め優秀な先生方を集めたものだと、今更ながら感心させられます。

○ さて今年三月、テレビで面白い番組を見ました。「開運、なんでも鑑定団」と云う人気番組に、三宅克己、丸山晩霞の絵が登場したのです。鑑定結果は？　（注1）三宅克己の水彩画：二百万円。丸山晩霞の掛軸：三十万円。

○ **今回、「中学世界」は「三康図書館」で、「中央公論」「改造」は「大宅壮一文庫」で閲覧、複写しました。**

― 完 ―

（注2）この文章は「発表要旨」だけですが、別に「資料集：八十三ページ」が添付されて居ます。

（注3）他にスライド（百枚以上）が有ります。